

セッション4：レポートをめぐり2つの国際的アプローチの両立は可能か？

セッション4では、「レポートをめぐり2つの国際的アプローチの両立は可能か？」をテーマに、WICI 欧州の会長の JPDesmartin 氏 (Edmund de Roschild)、VRF (Value Reporting Foundation) の英国オフィスの代表である Jonathan Labry 氏、元経済産業省企業会計室長で現在は内閣官房の参事官である松本加代氏をパネリストとして、WICI 会長であり、住友商事(株)執行役員 兼 住友商事グローバルリサーチ(株)社長の住田孝之氏がモデレータを務めて、グローバルなディスカッションを行った (同時通訳あり)。

冒頭、住田氏より、①このセッションでは、欧州を中心とするサステナビリティ報告のルール化の動きと、英米を中心とした団体及び IFRS による標準化の動きを、WICI が強みとするインタジブルズが接合できるかという点を議論したいこと、②両者の動きに WICI は積極的に関わってきたこと、③両者の動きの一致点と違いはどこにあるか、インタジブルズの役割は何か、につき、スライドを用いて説明。

各パネリストからは、VRF 及び IFRS 財団の動きを通じ、財務情報とサステナビリティ情報を接合したサステナビリティ報告を整備することが必要であり、統合報告の枠組みの役割が大きい。新しい標準においては、インタジブルズが crucial な役割を果たし、日本はリーダー的な立場にある (Labry 氏)。非財務情報のルール化で先んじている欧州では、ダブルマテリアリティの考え方を基本とし、インタジブルズの重要性を認識してその開示を義務化している (Desmartin 氏)。サステナビリティや価値創造にこれまで以上に関心が高まっており、日本も分厚い蓄積の下に政府が発信をしたい (松本氏)。などのコメントがあった。

世界の状況に関し参加者の認識の web アンケート (複数回答可) をその場で実施したところ、標準の一本化を望む声が 49%、複数の標準ができることへの懸念が 43%と多く、一方で 39%がサステナビリティ関連開示の充実を好感。義務化への不安が 31%となった。

次いで、こうした標準化の動きにおけるインタジブルズの役割、特にそれが両者を接合させることができるかにつき議論。企業のパースとしてサステナブルな社会を目指すことがその前提であり、VRF でもインタジブルズのグループを作るし、IRCouncil は両者の結合性に関するアドバイスをを行う機能を期待されているなど、これまでの WICI の活動の成果を活かすチャンスがあることが確認された。一方、tick the box 的な仕組みになることへの懸念も共有された。

企業価値や社会・環境へのインパクトの源泉として重視するインタジブルズについての参加者の web アンケート (単一回答) では、人的資本が 30%、企業文化が 25%、イノベーションが 19%、リーダーの能力が 18%などとなった。インタジブルズがイノベーションと関連性が強く、競争力の源泉であること、特に人的資本が重要であるが、企業固有のものなので単純な比較が難しいという難点があるだけに、企業が投資家に数字だけではない丁寧な説明をする必要があることなどが共有された。

パネリストからの最後のコメントでは、企業価値、社会価値の源泉であるインタジブルズの専門家としての WICI にはやるべきことがたくさんあることが共通認識として確認された。